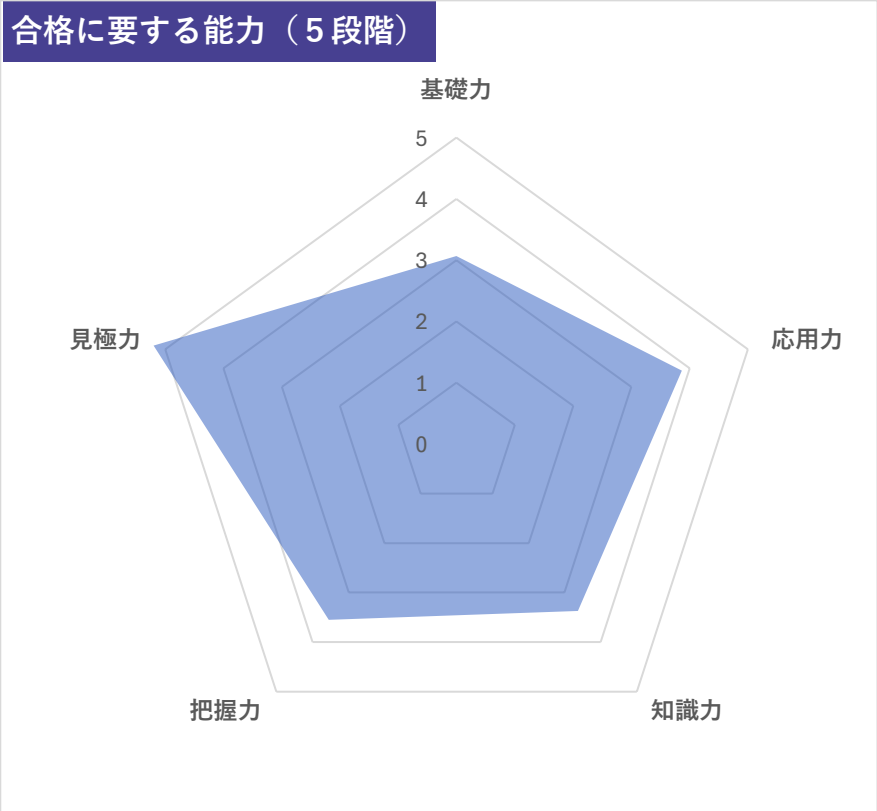


総合分析

試験区分	一般（後期）
------	--------

制限時間	60分（理科 2 科120分）	大問数	全 5 問
------	-----------------	-----	-------



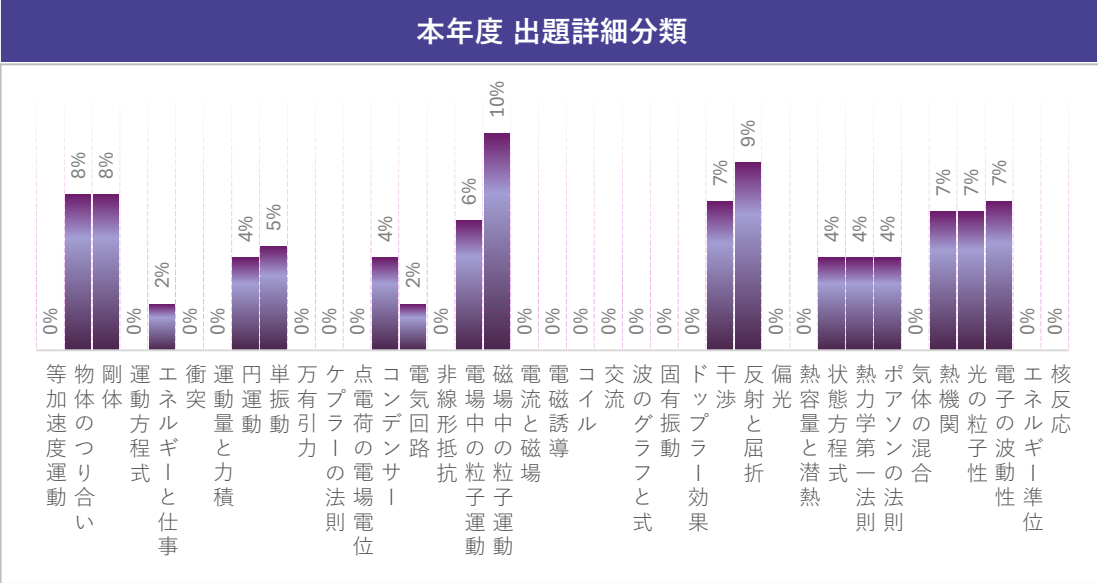
合格に要する能力（5段階）		
基礎力	2.9	原理についての理解
応用力	3.7	演習経験による慣れ
知識力	3.2	用語を正確に覚えているか
把握力	3.4	臨機応変に状況を把握する力
見極力	5.0	解きやすい問題を選択する力

特記事項	トップレベルの大学で定番のE×Bドリフトと中性子線干渉計が出題された
------	------------------------------------

出題分野	
力学	27%
電磁気学	23%
波動	16%
熱力学	20%
原子物理	14%

本年度 解答形式
選択肢 100%

本年度出題テーマ一覧	
第 1 問	小問集合
第 2 問	剛体のつり合い
第 3 問	E × B ドリフト
第 4 問	熱サイクル
第 5 問	中性子線干渉



特殊問題の有無	近似計算あり	グラフなし
正誤問題なし	理由記述なし	数値計算あり

総合評価				
難度	3.6	最難を 5 とする問題自体の難度	やや難しい	一次合格に必要な正答率（予想） 81%
分量	83分	完答に要する時間（制限時間は60分）	多い	極めて高い正答率を要する

入試の特徴と対策	- 設問ごとにテーマが一貫しており、目標に向かう流れがある。速やかなテーマの把握が鍵となる。 - 概ね法則の運用に関する応用的な出題である。物理計算への慣れが必要となる。 - 同時に複数の事柄への理解を要する出題が多い。独力で解法を組み立てる力を要する。
入試から見る大学が求める学生像	高難度で有名な現象の出題に目を引かれるが、全体に比してさほど多くないため、制限時間の厳しさからしても「時間を有効に使い、解きやすい問題を正確に解く試験である」という姿勢で受験することを考えれば、極端に高難度の試験とは言い難い。正確な自己評価のもとに得意分野で高い能力を発揮する学生を求めているのだろう。おそらく臨床医，専門医としての適性を測る試験となっている。